

---

# 幻想郷隠棲録

g.c

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想郷隠棲録

### 【Nコード】

N3064BA

### 【作者名】

g・c

### 【あらすじ】

親友は死んだ。彼の妻は姿を消した。そんなある日の帰り道、ふと気づくと、見たこともない草原にいた……。辿りついた場所、幻想郷で、彼は自分なりに生きてゆくことにする。幻想入りものです。主に人間の里での生活がメイン。大体原作沿いの流れで進行します。独自解釈や設定があり、オリキャラが出ます。

その日が来るまで（1）（前書き）

はじめまして。

色々なSSを読んでいるうちに自分も書いてみたくなって、今回初投稿となりました。

割と淡々とした話になりそうです。お付き合いいただければ幸い。

## その日が来るまで（1）

一年前、友人が死んだ。癌だった。大学生の頃から二十年近い付き合いの、親友だった。

南野耕介みなみのこうすけが死んでからというもの、久瀬蛭人くせけいとは「もういいかな」という気持ちになることが増えた。なにが「もういい」のかは自分でもよく分からない。だが、なんとなくそんなことを考えてしまう。

蛭人は天涯孤独に近い生活をしている。片手で足りる数人の友人を除けば、彼には近い人がいない。両親はまだ生きていると思うが、十年以上まったく連絡を取っていなかった。連絡先も知らないし、もう顔さえ忘れかけている。勿論ほかに家族もないし、恋人もない。あとは仕事関係の、薄く広い繋がりが幾らかあるだけだ。

そのぶん、数少ない友人たちとはそれなりに強い絆のようなものがあったし、共にいろいろんな経験もしてきた。とはいえ現在、一人は放浪癖があつてほとんど行方知れず。一人は遠くで堅実に暮らしているが、わざわざ会いに行くようなこともそうはなく。結局、蛭人にとっては耕介こそがもつとも近い者だったといえる。色々面倒な相談をしたりもしたし、力を借りたり、便宜をはかってもらったことも多々あった。世話になることばかりだったが、掛け値なしに大切な友人だった。相手にとつての自分もそうであつたと蛭人は信じている。

それほどの友人を持てたことが幸運なことであり、そんな関係は必ずしもなくとも生きていける。寂しいといえば寂しいが、それだけだ。なのに、どうも気力が足りない。それはやはりあの友人を失ったからだ、と蛭人は感じていた。寂しいとか悲しいとかそういう事ではない、が。やはり原因はそこなのだった。

親友が死んで一年。別に生活が変わるでもない。仕事は飯の種だ。彼の職場……都内にある、とある街場のバーは今日も大盛況だった。三月。別れの季節。年度末の週末のバーはいつもよりもはるかに忙しく、面倒な客もいて閉店は午前四時を回った。片付けも明日の開店前に回して今日はさっさと帰る……と行きたいが、翌日は定休日。そういうわけにもいかなかった。ようやく片付けを終えて店を出たのが五時半。空の色がもう変わり始めていた。

「お疲れ様でした」

「ああ、お疲れ」

お互い疲れ気味な他のスタッフと挨拶を交わし、まっすぐに自分のマンションへ足を向ける。

蛭人のマンションは店からは徒歩十分のところにある。とんでもなく近い。繁華街のすぐ傍にある赤茶けた建物は、こういう場所によくあるパターンでぼろく、住民もろくなのがない。それでいて割と高い家賃が必要だ。

店の裏から路地のような通路を真つすぐ行き、ぼんやりと下を向いて歩く。それほど長く住んでいるわけではないが、もう慣れた道だ。しかし、この日の帰り道は、いつもとは違った。

彼がそのことに気付いたのは、はつきりと状況が変わってから三十秒ほどたってから。

意識が散漫になっていて、蛭人は道がやけに暗いことにしばらく気がつかなかった。コツコツと響いていた自分の足音が、いつの間にかじやりじやりという土の道を歩く音になっている。視界に入っているのはアスファルトではなく、砂利道。おかしい。蛭人は足を止めて目を上げた。

「……………あ？」

ただっ広い草原が目の前に広がっていた。建物が一つもなく、空は広い。

薄明の淡い月明かりに照らされた草原は、まるでお伽話の光景だ。その真ん中を貫く、細い道に蛭人は立っていた。街の灯りなど、どこにも見当たらない。ふと風が吹いて、ざざざ……と草が揺れる音が響いた。それが止むと、痛いほどシンと静まり返る。

どう見たって、いつもの帰り道ではなかった。おかしい、馬鹿な、と蛭人は目を閉じて眉間に手を当てた。店で客に勧められて少しばかり飲んではいるが、それほど酒は入っていない。訳の分からない夢を見るほどではないはずだ。

自分は家に帰って、風呂に入って寝るのだ。今日はいつもより疲れているのだ。そう、さっさと帰りたい。軽く頭を振って一つ深呼吸をし、ゆっくりと目を開ける。

そこはいつもの帰り道だった。いつの間にか、夜明け近くの街の音が戻っている。

「……………夢？」

多少眠いとは言え、歩きながら夢を見るとは思えない。幻覚のようなものだったのだろうか、と周囲を見渡してみたが、いつもと何も変わったところはない。特に変なものも不穏な気配も感じない。

しばらくの間そこで自分の体やら周りやらを観察してみたが、結局何もわからなかった。こうなると、さっきのが本当にあったことなのかすら怪しいような気分になってくる。

「わけわからんわ」

現実か、夢か幻か。まるで化かされたみたいだと蛭人は思った。今どき狐や狸に化かされるなんて話はない。しかしそれ以上のことは何一つ分からず、蛭人はそのまま帰宅したのだった。

彼が、自分が踏み入った場所がどういふ場所であったのかを知るのには、これよりしばらく後の事である。

飯、風呂、寝るとルーチンで行動を終え、ベッドの中で眼を閉じていると、味気なくピリリリ、と電話がなった。携帯のサブ画面には『着信 南野家』と出ている。耕介のいなくなった南野家から電話をかけてくるのは一人しかいない。眠かったが、しかたなく蛭人は電話をとった。

『おはよう』

「俺はお休みの時間だ」

明るい挨拶にすげなく返して、ため息を隠さずに吐く。現在の時間は六時半。朝である。蛭人は夜の間だ。大体夕方の三時から四時に起き、寝るのは朝と決まっている。寝る時間も大体は知っているはずの者が電話をかけてくるには無遠慮な時間だった。

『そんなに冷たくしなくてもいいじゃない。寂しいのよ、私だって。話し相手ももうあなたくらいしかないし』

桐花きりか

耕介の妻、もう未亡人というべきか　は、耕介とともに

にかなり親しい付き合いがあったこともあり、今でもなにかと声をかけてくる。残された者同士としてありがたい。しかし今でも彼女は若く、美しく、もう二十年前とはいえ彼らのドラマチックな恋愛を見てきたものとしては、何となく後ろめたい物があった。彼女はしばしば意味ありげな事を言うため、妙に意識してしまう。それが嫌で、蛍人はあまり積極的に桐花に連絡を取らなくなった。自分がひどく卑しく感じてしまうのだ。

「……まあ、気持ちは分からないではないけどね」

耕介の、今は桐花の家は、都内とは言えかなり辺鄙な田舎にある。無駄に広い家といい、一人で住むにはやや気が滅入るのも仕方がない。もともとはそこに住んでいた彼女のために耕介が居を移したのだが。

「でも、電話なら<sup>うつき</sup>卯都木のところでもいいだろ。朝は勘弁してくれ。年度末の週末なんだ、今日は結構疲れた」

今は神戸に住んでいる、自分たちと親しい別の友人の名前を挙げる。彼女と、名前を上げた友人夫婦は特に親しかった。

『ああそうか、そんな時期だったわね。時間は悪いとは思ったのだが。でも、なんとなく声が聞きたくなったのよね』

「なんだそれは……」

まるで恋人のようなセリフに呆れた口調で返しながら、蛍人はその意味を考えた。思わせぶりな言動こそあれ、彼女が本気で蛍人のことを想っているわけではないことは知っている。こういうのが彼女の挨拶の一種なのだ、と頭の中で確認する。



『どっ？ 変りない？』

その質問に一瞬今日の出来事を回想し　そう、今日があった。妙な白昼夢、もとい幻か。何かに化かされたような僅かな時間。見たこともない月明かりの草原。耕介がいなくなった今、こうしたことを相談できるのは桐花くらいだった。

「ああ……。うんまあ、別に変わったことはないね」

しかし、蛭人はそれを話さなかった。今から話せば長くなりそうだったし、なにより眠い。たとえそれが大きなことにつながるのだとしても、とにかく面倒だった。

『ふうん。それならいいのよ』

あっさりと相手は流した。今までだって何か問題を感じたときは耕介や桐花に頼ることが多かったし、彼らにわざわざ隠し事をすることはない。ただ、今話すのが面倒なだけである。

「でも、なんとなく不安なのよねえ。ふいつと会えなくなってしまういそうな気がするのよ。そう考えたら、私の知り合いの中でいちばん心配なのは、あなたよ。卯都木たちのところはいいのよ。仲良くやって行くだろうし、あまり心配にならないもの」

「優一はよくて、俺は心配になるのか。別にいいよ、そういうのは」

何歳だと思ってんだ、お前は俺のお母さんか、という言葉をどうにか飲み込んで、彼はぶっくらぼうに答えた。朝の光が、カーテンの向こうにだんだんと満ちているのが感じられる。いい加減眠くて仕方がない。

『まあそういうもんなのよ。それにしても、疲れたなんて珍しいじゃない？』

「面倒なタイプのおっさんが今日は三人もいたんでね。こういうシーズンしか来ないような客はたちの悪いのが多い」

送別会の帰りだとか、二次会だとか、そんなのでやってきておいて店員に絡むような、ろくでもない客がたまにいる。こちらは慣れているから、暴れでもしなければ多少絡まれるくらいは構わない。しかし忙しい中でそうやって捕まってしまうと、他のスタッフにも迷惑がかかるし、連れの客も悪い空気に辟易する。それは周りの関係の無い客にまで伝わっていくのだ。そういうのが精神的な疲れを呼ぶ。

普段なら今日来た一見の客がいかにもひどかったか愚痴がこぼれるところだったが、その前にくあ、と長い欠伸が出た。電話から口を離しはしたが、桐花には伝わったらしい。

『ああ眠いのよね。ごめん。それじゃ』

ああ悪いね、また、おやすみ。さっさと通話を切ろうと携帯を耳から離す。電源ボタンを押す寸前に、桐花の『たまには……』という声が小さく耳に届いた。

その声に、彼は少しばかりイライラしていた自分の対応を反省しながら携帯を投げ出し、目を閉じた。本当に眠かった。

そして、その数日後、南野桐花は姿を消した。

## その日が来るまで(2)

なんとなく、蛭人には予感があった。確信に近い予感。 南野

桐花には、もう会うことはない。

いつかはこうなるだろうという気がしていた。そう、時間の問題だったのだ。

あのあと数日後に思い出して、桐花に電話をかけた。もともと蛭人は桐花のところを二月に一度くらいは訪ねていたし、翌週の休みにでも訪問しようと思ったのだ。しかし固定電話も携帯も繋がらなかった。

翌日になっても連絡がつかず、嫌なものを感じて同じく耕介や桐花と親しかった友人にも電話をかけたが、やはり連絡がつかないことを知った。友人 卯都木優一はひどく心配していたが、彼の住まいは神戸である。そうそう簡単にやって来るというわけにもいかない。

『悪いんだけど蛭人くん 』

そんなふうに頼まれて、彼は慣れない高い太陽に照らされながら南野家までバイクを走らせることになった。そのことに別に不満があるでもなかったが、今更急いでも仕方がないとか、行ってもきつと会えないだろうとか、そんな気持ちで彼の足は重かった。途中で五年ぶりに煙草を吸ってみたりしながら、二時間以上かけて西東京の辺鄙な土地まで走った。

最後の電話で、桐花はなんと言おうとしたのだろうか。たまには会いに来い、だったのか。たまには電話しろ、だったのか。それとも、たまには皆で集まりたいだっただろうか。いずれにせよ、やは

り考えても遅いことのようにだったが、そればかりはどうにも悔やま  
れた。

電気やインターネット回線が通っていることが不思議なほど人里  
から離れた一軒家、南野邸の前で大型外国車のやかましいエンジン  
を切ると、あたりはしんと静まり返った。人の気配というものはな  
く、鳥の音が響く。

どうにも寂しい気持ちでバイクを降り、ぼんやりしていたせ  
いでスタンドを出し忘れて転倒させそうになってそれを支え、立て  
直した。路肩に停め直し、フルフェイスのヘルメットも取らずに門  
をくぐる。

玄関の鍵は開いていた。家の中にも人の気配はない。そのままず  
かずかと上がり、居間に行けばテーブルの上に分厚い封筒があつた。  
ふう、と息を吐き、ようやく蛭人はヘルメットを取って床に転がし  
た。

上質なソファヘッドスンと腰をおろし、僅かな逡巡の後に封筒を手  
に取る。中身は、資産の譲渡に関するものだった。すべて桐花に相  
続されたはずの、蛭人の感覚で言えば莫大と言つていい耕介の遺産  
が、基本的にすべて滞り無く自分に譲渡『された』事になっている。  
いつの間にかこの家も蛭人の所有する物件らしい。あまりその手  
の知識はないが、見たところ不備のなさそうな書類に見えた。

いつの間にかそんな知恵をつけたのか、とうとうか、蛭人には『そ  
ういう』税理士や弁護士に相談をしている桐花の姿が思い浮かばな  
かった。何かまっとうでない手段を使ったのだろう。生きているう  
ちに耕介の頭でも借りていたのかも知れない。耕介は蛭人やその繋  
がりを通さなくともそれくらいのことではできたから、可能性は高か  
った。

最後に一枚の便箋が出てきた。流麗な文字で『いつかまた会いま

しょう』とだけあった。

蛭人はそれだけ読むと、もう大体のことは分かった気がした。

「ああ やっぱ、な」

桐花は自分の本来の生き方に戻ったのだ。それだけのこと。

南野桐花という女は、本来そういう奴だったのだ。耕介の傍にいたのが、本当に特別で例外的なこと。別に耕介のように人付き合いが最悪というわけではなかったが、彼女もまた、結婚して人の輪の中に入って暮らす、そういう事が普通に出来る女ではなかった。

立ち上がり、蛭人は広い家の中を一応見て回った。人の気配はないが、どの部屋も、未だ塵ひとつない状態を保っている。

「いい奥さんしてたよ、ほんと」

友人としての鼻肩目を抜きにしくとも、南野耕介という男はいろいろと難しい男だった。桐花はその妻として、かいがいしい世話を焼いていた。この家にはそんな彼女が作った居心地のよさが、まだどこか残っている。

今はぴかぴかの状態を保っているテーブルにも、これからは少しずつ埃が積もっていくのだろう。耕介、桐花、友人たちが賑やかにこの家でテーブルを囲み酒を飲んでいたときのことを思い出し、蛭人は訪れるだろうその未来を見たくないなと思った。

すぐに電話を掛ける気にはなれず、蛭人はとりあえず南野家を出



「あら、聞こえませんでしたの？」

「……はあ……？」

こちらを向いて喋ってすらいなかったくせに、やれやれしようがないですわねとても言わんばかりの流し目をくれた女に、彼は内心イラツとした。大体、ヘルメットかぶった男がバイクの傍にいた。よくもまあ図々しくシートに腰掛けていられるものだと思う。

「幻想郷はすべてを受け入れる。だというのに残念なこと　そう言ったのですわ」

「げんそうきょう？　いや、それよりですね　」

言いかけて、蛭人は気付いた。体を電気が走るかのように、その瞬間に直感した。

この女、『人間ではない』！

あまりにも唐突な出現で気付かなかったが、ほぼ絶対の確信があった。纏う雰囲気はほぼ人間のそれだが、やはり違う。どうやって現れたのかは不明だが、南野邸は辺鄙な田舎の一軒家である。ついさっきまで視界に居なかった人物がちょっと目を離れた間に現れるなど、不可能なはずなのだ。

全力で警戒しながら一歩後ろへ下がる。人外の女はそれを見て面白そうに目を細めた。

「あら。一応隠してたつもりだったけど、最近でも意外と鋭い人間はいるのね」

大したことは言っていない。しかしこちらを見下していることが

はつきりわかる態度で、蛭人はどうにもイライラさせられた。やめたほうがいいとは分かっているけど、普段はそんなことをしない自分がつい敵対的な態度になってしまおう。それすら計算に入っていないような相手だ。かなり食えない。

「……ここに住んでた俺の友達なら、ひと目で気付いたと思うよ。それで、あんた、誰。桐花の知り合いか何か？」

南野耕介は、周囲のありとあらゆる怪異の存在、および不可思議な力のすべてを目視し、感知し、触れ、操ることまでできるという、ちよつと異常なほどの異能の持ち主だった。人間にもそれ以外にも見ることでできない、他者とは完全に違う世界を見て生きるがゆえに、とても孤独な精神の持ち主でもあった。彼ならば、目の前の女を一目見た瞬間に正体を看破しただろう。

そしてその妻だった女も、特殊な事情があり 簡単にいえば、人間ではなかった。鬼女、山姥、山姫、いろいろと呼び方があるが、要するに妖怪の類である。千年以上生きているのだというのが本人の弁だった。山に住む鬼女としての顔と、神童の母や産霊神としての二つの顔がある妖怪。もっとも、二人の間に子供はいなかったが。

そして、その二人が暮らしていた家の前にあらわれた、この人外の女。桐花が消えたことと何か関係があるのか、と一気に緊張した蛭人だったが、女は全く意にも介さない様子で余裕を崩さなかった。ふいと蛭人から目をそらすと南野邸へと視線をやり、ぼそりと呟く。

「へえ、そう。なかなか鋭いかたでしたのね。ちゃんとお会いしてみたかったわ」

「……あんたみたいなのが一番嫌いだったと思うよ、そいつは」  
「それは残念」



事実である。耕介は怪異一般にあまりいい感情はいだいていなかった。こういういかにもな態度を取るものなら尚更だったろう。

「それで。あんた、誰」

「私は、八雲紫。境界を操る妖怪。はじめまして、人間さん」

向き直ると、女は優雅に一礼した。貴婦人を思わせるような、みごとに礼。なのだが、ひどく芝居がかかっている、とても友好的な気分を誘うものではなかった。慇懃無礼というのがまさにふさわしい。自然、蛭人の態度もそっけなくなる。

「どうも。それで？」

「ここにいた妖怪に興味があっただけよ。もう居ないようだけど」

「そうかい」

一度蛭人に向けた視線をすぐに外して家の方へ行った女妖怪に、彼は力の抜けた返事を返した。どうやら相手は自分を相手にする気はまるでないらしい。ほとんどこちらへ興味がないと見える。

目の前の女からは、桐花のように、いやそれ以上に永い時を生きた者らしい重厚な力が感じられた。いわゆる大妖怪という奴なのだろう。それが言うのだから、桐花がもう居ないというのもどうやら本当らしい。大体において、人外というのはあまり自分に関係の無いところでわざわざ嘘はつかないものだ。……とすると、桐花がいなくなったこととも、やはり関係がない。口ぶりからしてどこへ行ったのかを知っているとも思えない。

なんとなく分かっていたとは言え、やはり落胆せずには居られなかった。

「ふふ。想い人が何かだったの？ やめておいたほうがいいし、会えなくてよかったというものですわ」

彼の落胆を感じ取ったらしく、そんな言葉がかけられた。この女は色々と勘違いしている、と思いながらも、蛭人は特に訂正する気はなかった。相手が何を勘違いしようと、それでこちらに何かしてこないならメリットはあってもデメリットはない。訂正するだけ面倒だし、そんな気力も湧いてこない。

「そーね。そうかも」

しかし、気が抜けたままだった返事に女はなにか感じたらしく、振り返って蛭人の顔をまっすぐ見た。そして、ひどく冷たい目をした。

「違ったみたいね。餌にしたくなるような顔をしてるわ。ここではやめておくけど、せいぜい懸命に生きることね」

そう言い放つと、ひょいとバイクのシートから降りて女は歩きだす。

「おい、あなた」

「うきげんよう」

蛭人は声をかけたが、その前に空間に縦に亀裂が入り、意味不明な異次元空間のようなものがぱくりと口を開けた。中にはぎよろぎよろとばかりかい目玉がいくつも見える。ぎよつとして彼が体をこわばらせている間に女は振り返らずそのままその空間へと入り、姿を消した。すぐに空間の裂け目も閉じて消える。

数秒の間そのまま固まっていた蛭人だったが、八雲と名乗った女が去ったらしいことをようやく確信して息を吐いた。

「なんなんだ全く」

境界を操る？ あの女の力か。境界 何も無い空間に境界とやらを作ることもできたのだろうか。なんとも無茶苦茶な。あの身の目玉は何なのだ。

「わけがわからん」

なににせよ、やはり桐花はここを去ったらしかった。紛れもなく彼女自身の意志で。今はどこぞの山の中か。

蛭人はそれを友人たちにつましく説明できるかどうかを考え、難しさにため息を吐いた。

春が終わり、夏が過ぎ、秋が来た。

仕事自体に蛭人は真剣だったし、それなりの充実感や誇りも持っていた。しかし、なにか自分がだんだん今までとは違ってきているのを感じていた。そういう時期が来たのだと、どこかで納得もしている。

桐花からほぼそっくりそのまま渡ってきた耕介の遺産には、あまり手を付けていない。一部の書籍や、役に立つだろうものをいくらか自宅に持ち込んだ程度である。

どこかぼんやりした生活。

孤独が辛いわけではない。ただなんとなく、自分を繋ぎ止めるようなものが無くなってしまったことを蛍人は感じていた。耕介。耕介に頼まれていた彼の妻。どちらも行ってしまった。家族はなく、友ももう少ない。近くには誰もいない。

夏のあいだに、彼はあの不思議な草原を何度か幻視した。少しばかり歩いてみたりもして、やはり頭を振って帰ってきた。夢幻のような……しかし、夢ではない場所。少なくとも、ただの幻ではない。ここではないどこか。何故だろうか、あそこのほうが、むしろ今よりも自分のいるべき場所のように蛍人は感じた。

なんとなく周辺を整理した。自分のものは初めから大してなく、手間がかかるのは耕介の遺産のほうだった。いくらかの自分が必要そうなもの以外は売却したり形を変えたりして、然るべき場所。耕介の遺志を汲んで親族は除き、共通の友人たちへ。普通は取り合いになるようなものなのに、自分たちは押し付けあう形になった、と彼は苦笑せざるを得なかった。残る少ない友人たちならば有効に使ってくれそうではある。

耕介が財産を桐花に遺したのは一応彼女のことを思っただろうが、桐花が自分へそれをやったのは大した考えがあるとも思えない。おそらく、耕介に一番近いものだったから、とかその程度だろう。彼女には財産などそもそも必要ではなかった。

いくつかの手紙を書き終えた。荷物は減り、彼の部屋は一人暮らしを始めた大学生が引っ越してきた直後みたいにならんとした。

仕事の行き帰りには、耕介の使っていた革の鞆を持ち歩くように

なった。一二泊しそうな四角い鞆に同僚たちは不思議そうに蛭人の手元を見ていたが、適当にごまかすうちにやがて質問はなくなっていた。

そうして、身辺整理もあらかた済んだ頃。

秋のある日、いつもの仕事帰りに、再び蛭人はあの草原に立っていた。

その日が来るまで(2) (後書き)

プロローグ終わり。

## 彼岸に一番近い場所

辺り一面が彼岸花で埋め尽くされている。この草原は彼岸花の草原であつたらしい。満月に照らされた紅の花々は、本当にこの世のものではないかのようだ。どうにも、この場所に自分は引かれていゝらしいと蛸人は思った。もう、何度もここへ来ている。

しかし、今回ばかりはあまりの美しさに彼は完全に足を止めた。息をするのも忘れて見渡す限りの花々を眺める。

「 ああ 」

意味もなく声が漏れる。とにかく美しい。幽玄の空気なのに、息を吸えばどこか活力まで湧いてくるようだった。なんというか、ここはとても空気がいいのだ。

彼岸花の赤い絨毯は、月明かりの中でも紅よりも赤い。毒と死の華。しかし、自分にとってはまるで再生するかのような……。

「 きれいでしょう? 」

少しの時間をぼうつとなつて眺めていた蛸人は、不意に後ろから声をかけられて絶句した。まさか人がいるとは。

振り返れば、柔らかい微笑をたたえた美女がそこに立っていた。染めたわけでもない自然なリーフグリーンの髪、赤く鋭い瞳。あからさまに人間ではない容姿だが、わざわざ姿を確認するまでもない。表情とは裏腹に叩きつけてくる、途轍もなく強烈な圧力が明らかに人間のものとは違う。ここまで強烈な気配だと、その手の知識を全く持たない人間でも危機感を感じるに違いない。

言うまでもなく人外である。それも、極めて強力な。

「……そう、ですね」

緊張を隠せなかったが、どうにか蛭人は答えることができた。

「あなたは外の人ね。花を摘んだりしないなら、少し眺めていけばいいわ。お帰りはあちら」

冷汗が出るような空気をふつと緩めて、後ろ手に持っていた日傘らしいもので緑の髪の女は背後をさした。どうやら話は通じる相手のようにだった。自分の要求を押し通すために、まず初めにこちらに圧力をかけてきたのだろう。

「ありがとうございます。でも、済みませんが少し」

質問しようとして、蛭人は何を聞けばいいのか分からなくなった。目の前の女性が人外だというのはわかる。ここがどういったところなのか？ おそらく、彼女のような者が暮らす場所。それはなんとなく分かっていた。これからどうすれば？ そんなことは相手が知るわけがない。聞くべきことでもない。

「なにかしら？」

少しばかり剣呑な雰囲気になりかけた相手に誤解される前に、蛭人は素直に話をすることにした。話が通じる相手には、そういう態度が一番早いものだ。

「いえ、何か訊こうと思ったんですが、何を訊いたものかわからなくなってしまうって」



「幻想郷。忘れられたもの、常識から外れたものの集う地。あなたは外から来た人、外来人。ここは再思の道。生きることが諦めた人間がたまに紛れ込む場所。思い直したなら帰れる可能性も高い。そして、私は花を操る妖怪。もし死にたいなら、私がここから叩き出してあげるわ。三途の川のほうにね」

にこやかな顔で物騒なことを言う。面倒な問答を省く淡々として凝縮された状況説明はしかし、納得のいくものではあった。

「なるほど」

幻想郷 桐花がいなくなったときに会った、八雲と名乗ったあの妖怪が言っていた言葉だ。あの妖怪がここを知っていたのは間違いない。ひよつとすれば、あの妖怪もここにいるのかも知れない。好きになれそうもないタイプだったし、わざわざまた会いたいとは思わないが。

ようやく冷静さを取り戻してきた蛭人は、店で客に接するときの感覚で話をすることにした。色々と詳しく話を聞きたいところだったが、あいにく目の前の女性は厄介な相手のようだった。本来こういうタイプは、カウンターに座っていても、向こうから話しかけてくるまでは放っておくのが正しいのだ。質問は最小限にしようと考えた。

「ここには人 人間は居ないんでしょうか？」

「人里があるわ」

とても短い答え。ご機嫌はマイナス1ポイントといったところだろうか。女から発されるぴりりとした空気が肌に痛い。

「良かったら、その人里に行く道を教えていただけませんか」

彼のその言葉に、面倒くさそうだった相手は少しばかり怪訝そうな顔をした。

「いいけど。変わってるわね。帰るでも死ぬでもなく人里に行くの？ ここからは少し遠いわよ」

「はい。 助かります」

女妖怪 風見幽香と名乗った はきちんと道も教えてくれ、簡単な注意までしてくれた上、彼岸花の草原を抜けるまで送ってくれた。

「ここを真つすぐ行けば魔法の森。鬱蒼とした森だからすぐわかる。そこにぶつかったら、右へ。なんとなく道のようなものがあるからわかるかも知れないけど、森の周りを歩いていけばそのうち正面に人里は見える。足で行くには少し遠いわね。あと、魔法の森は人間は瘴気にやられるから、もし入ったなら気をつけなさい」

態度（というよりは圧力的な空気）と口調はそれほどでもなかったが、必要なことは言ってくれる彼女は、思った以上に親切だといえた。こちらから色々と質問をするのは地雷を踏みそうな気がするが、相手が喋っているならばきちんと聞いていけばよさそうである。さっさと別れたいのだろう、早足ですたすと歩く彼女の言葉を邪魔しないように相槌をうちながら、彼は殊勝な態度で注意を聞いた。

別れ際、礼を言う蛭人に彼女はふと思い出したように言った。

「人里に入っではいけないわけではない。でも、人里では人間を襲

わなないことが、この幻想郷の約束事になっているわよ。大丈夫なのかしら」

「え？」

「あなた、随分と夜目が効くみたいじゃない？」

月明かりしかない夜道を危なげなく歩いていたことを指摘されたが、その一瞬を風見幽香は保てず蛭人は一瞬青ざめた。すぐに表情を繕ったが、その一瞬を風見幽香は見逃さなかった。表情は穏やかなのに、なぜか酷薄そうに見える笑顔でにこりと笑う。

「フフ。やっぱり」

久瀬蛭人は、人外でありながら、ほぼ完璧に人外としての気配を消し去ることができる。黒髪黒目に見えるが、瞳の色も本来は赤。片目ずつ色を変えるなどという器用な真似まで出来た。人の中で生きる技術として培ったものである。怪異というものに異常に敏感な、南野耕介という友人がいたからこそ出来るようになったことでもあった。

もつともここまでできても、耕介にはやはり判つたらしいのだが。このあたりは異能の異能たる部分であり、仕方がない。

街の灯がまつたくない道など、蛭人はそう歩いたことがない。いわば都会派であることが悪い方向に出た。完全に真つ暗なら見えないうらみくらいたるうが、半端に見えてしまっていたことと、どうにも厄介そうな相手に対するプレッシャーで気が回っていなかったたのである。

風見幽香という剣呑で強力そうな妖怪に対し、『人間』としてそれなりに友好的に接することができた以上、正体は伏せるつもりだ

った。固まった蛭人に、幽香は気にするでもなく話を継いだ。

「ああ、別に妖怪だったらどうこうなんてことはないわ。それにしてもしずいぶん器用ね。完璧に気配がない。そういう妖怪なのかしら？」

そういう妖怪というのも、そう珍しいわけではない。人に紛れれば完璧に人を装える種類のもの。しかし蛭人はそうではなかった。

「いえ。……吸血鬼です」

なるべく妙な気配を見せまいと、蛭人は正直に答えることにした。どういふ扱いになるかは分からないが、変に隠すよりは安全だと判断した。そう簡単に滅ぼされる気はないが、はつきり言ってこの妖怪に腹を立てられたら、確実に身を守りきれるかどうか怪しいような気がする。少なくとも相当痛い目には遭いそうである。

その答えに、相手は初めてはつきりと驚きの顔を見せた。

「あら。珍しいというか、あなたは随分腰が低いのね。吸血鬼のイメージが変わりそう。夏に騒がしかった紅魔館の馬鹿に見習わせたくなるわ」

「僕は眷属上がりですから。出来れば、伏せてもらえると助かります」

丁寧に頭を下げれば、風見幽香は楽しそうに笑った。顔をあわせてから初めての、威圧を感じない笑いだった。

「本当にイメージが変わるわね。別にそんなに頭を下げなくても、誰にも言いはしないわ。」

そうね……あなたが人里で『これまで通り』の生活をするつもりなら気をつけなさい。あそこにはちゃんと術師や守護者がいるから、見つければただでは済まさないはず」

「わかりました」

「ま、がんばるのね」

にこにこからニヤニヤに変わった笑いを浮かべてそう言つと、風見幽香は背を向けてひらひらと手を振った。どうやらここまですらしかった。

「ありがとうございます」

最後にもう一度礼を言い、蛭人は人里を目指した。

## 彼岸に一番近い場所（後書き）

人間のおっさんではなく、おもいつきり人外な主人公です。

特にミスリード狙ってたわけではないけど……なんかミスリードになってたので、そのままにしています。

幽香は四季の花が咲くところにいるんだってさ　じゃあ秋は彼岸花だよ！　という発想。

人間の里(1)(前書き)

今回、少し長め。

長さはわりとまちまちになりそうです。

## 人間の里（1）

久瀬蛍人は、吸血鬼である。

大学時代、約二十年前に、それまでファンタジーとしてしか認識していなかった吸血鬼に出会い、襲われ、眷属とされた上で放置された。色々と人生は狂ったが、そのおかげでできた親友や関係もあるので、さすがに幸福とは言わないが、今ではそれほど不幸とも思っていない。

そして一年ほど経って再び出会った際に親吸血鬼を滅ぼし、吸血鬼として自立。その力を自らのものとした。おかげで二十歳そこそこのろくに何も知らない強力な吸血鬼が生まれることになり、妖怪やら退治屋やらその他もろもろ、勘の鋭いものに絡まれたことも多い。種族としてのポテンシャルの高さ、それになにより友人らの助けでそれらを何とか乗り切ったが、それがなかったらどうなっていたかは分からない。というか死んでいただろう。

おかげで生き延び、今ではそれなりに力をつけたと思っていたのだが。

「ッハア。そうだよな。いきなりあんな凄そうな妖怪と会うからとんでもない魔境かと思ったけど、ちゃんと通じるよな」

目の前に飛び出してきた妖気を漂わす大きな猫のような獣に驚いたが、すぐに魔眼で隷属させて追い払って、蛍人はようやく少しだけ自信を取り戻した。

さきほどの風見幽香、あれほどに力がある妖怪には、まず魔眼は



通じない。見た瞬間通用するイメージが無くなった。以前出会ったあの八雲紫もそうだ。桐花も無理だった。しかし、それ以外の妖怪なり怨霊なりにはこれまでほぼ確実に効果があったのだ。十数年の訓練を経てこれだけ使えるようになり、ここ五、六年は厄介ごとはすべて回避できるようになっていた。

目を合わせたものを強制的に従える、いわゆる吸血鬼の魅了チャームの魔眼であるが、蛭人はこの魔眼と妖気の隠蔽にはかなりの自信があった。あの風見幽香にはそれが二つとも通用しなかったのだ。自信もなくなるうというものである。どちらも基本的に身を隠す以外には使っていないが、これは彼にとって結構な衝撃だった。

まあ、魔境というのは間違ってはいまい。なにせ大自然真つ只中、出会うのは人外ばかり。これまで彼が見たのは、妖怪が一、妖精が二、妖獣が一である。普通の動物にさえ出会っていない。

野生？ の妖獣など蛭人は初めて見たし、おまけにこちらに見向きもせずきゃいきゃい騒いでいる虫羽つきの小さな少女少女。相手の目に止まらないようにそつと通り抜けたが、フェアリー？ 妖精？ と蛭人は相当に驚いていた。見たこともないものがポンポン出てくる。

「それにしても」

風見幽香の簡単ながら要点を圧縮した説明は、思い返してみればそれなりに示唆に富んだ内容ではあった。

「『幻想郷』は忘れ去られたもの、常識でなくなったものが集まる場所。『再思の道』は生きることが諦めた人間が迷い込みやすい。思い直せば帰れる。いや可能性が高い、か」

むちゃくちゃだなとは思いますが、ここはそういう、自分も含めむちゃくちゃなものがあるべき場所のようだ、という予感はある前からあったのだ。事実、ここに来てからというもの、体がなじむというか、とても調子がいい気がする。そういう場所なのだ。そしてそういう常識外の物事だらけの場所では、常識外の出来事も起こるといふことなのだろう。そう納得するしかない。

妖怪というものは当然、忘れ去られたもの、常識でないものに入るだろう。だから彼女、風見幽香もここにいた。自分も妖怪である。そして、まあ生きることを諦めたというのはさすがに当てはまらないと思うが、標を失った状態ではあった。だから、自分はあるところへ来ていたのだろう。だから、自分はここに来ようと思ったのだ。

「サイシの道。祭祀、才子、再思」

なんとなく、再思の道というのが正しいのだろうと螢人は思った。仏教用語が何かだったような気もする。再思する道。引き返すことも出来る、と。三途の川というのは比喻だろうと思うが、もしかしたら本当にあるのだろうか。

「常識が木っ端微塵だな。いや、ここじゃ常識にとらわれてはいけないのか。常識じゃないものの場所らしいしな。そもそも俺自身も常識的存在ではないわけだし」

それから、『夏に騒がしかった紅魔館の馬鹿。見習わせたい』。

要するに、紅魔館というところに偉そうな吸血鬼が住んでいる。その吸血鬼は、夏には何かやっていた。風見幽香はそいつをあまり気に入っていない。

「まあそんなところか」

風見幽香という妖怪は、多少過激な印象はあったが、自分のテリトリーさえ犯されなければあとはどうでもいいというタイプと見えた。つまり何らかの形で、その吸血鬼の影響が彼女のもとにも届いたということになる。あまり他人とのかかわりを持たなそうな彼女にまで影響が及ぶあたり、それなりに力ある吸血鬼ということなだろう。

蛭人の分類上でいう、いわゆる純血の吸血鬼が偉そうだというのは理解できた。旅行中の老紳士を装っていた、自分の親吸血鬼を思いついてみればいい。尊大で、紳士的なようでもこちらを完璧に見下しており、あちこちで人間を自分の手のひらの上で転がして遊ぶのが趣味という奴だった。まあ人外、それもいわゆる妖怪に分類されるようなものには、自分も含め多かれ少なかれそういう部分はあるとはいえ、された身としては気分のいいものではない。

あとは人里。『術師や守護者』というのがどんなものかは分からないが、まあこれまでとやることはそう変わるものではないだろう。

「だいたい、襲うなと言われてもね」

妖怪に、それも吸血鬼に人間を襲うなというのも、どだい無理な話である。なんせそれをしなければ飢えてしまう。紅魔館とかいうところの吸血鬼がどうしているかは知らないが、食事の問題はちゃんとあるだろう。そいつらはそいつらで、食事の問題は自分で解決しているのだろうが、蛭人としてはあまり慣れ合いたくなかった。というよりも、仲良くなれないだろうというのがほんとうのところだ。

だったら、人里に術師とやらがいたとしても、自分の面倒は自分で見なければならぬ。

『この国はおおらかだ。余程のことをしなければ誰も出てきそうにない』

かつての親吸血鬼の言葉だ。まあその後に眷属を育てるにはいい場所だ、と続いたのだが……。実際、この国にいるその手の術者はそう積極的には人外を排除しようとしぬい。蛭人も勘違いや行き違い以外では術師に何かされたことはほとんどなかつた。だから、それほど苦労するとは思っていない。

「ん？」

そういえば、ここは日本なのだろうか？ と当然あつてしかるべき疑問に彼はようやく気付いた。風見幽香という日本風の名前、ごく普通に日本語が通じていたことから自然にそう考えていたが、どうなのだろうか。

まあ行つてみてからだ。蛭人は頭を切り替える。

彼はそこから半日以上の間、途中で我慢できなくなつて軽く走ったりしながら、ひたすら歩き通した。妖精に「がいらいじんだ！」などと観察されたり、今度は猪のような妖獣をにらめっこ（魔眼）で追い払つたりし。

そして、夕刻にようやく人里を見たのだつた。

夕方に人里へたどり着き、なにやら色々と珍しそうに見られてから、私が預かるう、いやうちがという妙な取り合いをされたあと、蛭人はある里人の家へ厄介になっっているいろと説明を受けることになった。

辿りついた人里というのはまったく現代の街とは違っていて、蛭人の目には非常に新鮮だった。なんとというか色々違うところは多いが、昔すこし見たことのある江戸時代の写真を思わせる。建物は江戸時代よりはだいぶ進んでいるように見えるし、人々が着ているものは和服も多いが、和服から洋服の要素を取り入れながら独自進化を遂げたような独特の服を着ている人が多く、その雰囲気の違いはまさに異世界といったところ。

それでいて、ここは日本でもあるという。不思議なものだった。

蛭人は仕事帰りの格好、つまり完全な洋装　革靴、黒のスラックスに白シャツ、ネクタイにチョッキという仕事着にコートを羽織った格好である。和風異世界とでもいうべき場所ではやや浮いていた。

きみにもわかるように話をしてやる、と彼を家に上げたのは宮崎明あきという三十過ぎくらいの男だった。彼自身、五年ほど前に外からやってきた同じ「外来人」であるらしい。外見が二十の頃から変わらないので蛭人より年上に見えるが、実際は年下である。

そうして、ようやくこの宮崎のもとで蛭人はこの世界、この場所に関するまとまった話を聞いたのだった。

幻想郷 『幻と実体の境界』、『博麗大結界』という二つの結界によつて、外の日本とは隔離され、全く別の文化を築いている、いわば小さな異世界。小さな、とは言つても、小さい県くらいの広さはあるらしい。二つの結界は外の世界と幻想郷を論理的に遮断し、外の世界で『幻』として否定されたものでなければ、基本的にここには入つてこない。また、『幻』は実体ある外の世界へ出られない。そして、この幻想郷の多くの住人である『幻』とは……やはり神妖怪、妖獣、魔法使い、妖精といった人外のものたちである。もちろんこの人里のように人間もいるが、この幻想郷は『妖怪の楽園』というふうにも呼ばれるらしい。つまり基本的には人外のための世界であるということだ。

ただ、まれに偶然外の人間が入り込む。それが自分たち「外来人」<sup>○</sup>。宮崎の説明は立場が同じ（ということになっている）こともあつて、中々わかりやすかつた。

蛭人にとつて、ここが日本だということがもつとも意外だつたことだ。出入りがほぼ一方通行なのは覚悟していた。肉体を持った神魔法使いや妖精という種族など、蛭人がこれまで知らなかつたものも多く話に出はしたが、それらは今更驚く程でもない。おおむね予想通り、またはその範疇といったところである。

彼はそれらを『なかなか信じられないが、信じるしかない』という、少々難しい演技をしながら聞いた。

「……と、まあこんなところか。大体の説明は」

ひと通りの説明を終えて、さて、と宮崎は二本の指を立ててみせた。

日が落ちた家の中は薄暗い。九月だというのに気温は低く、二人の間には囲炉裏に小さな火がおこっている。

「外来人には二つの選択肢がある。ひとつは、おれを見れば分かると思うが」

つまり、ここで暮らすということだろう。蛭人はわかる、と頷いた。

「もう一つが、外に帰ることだな。たださつきも言ったが、『博麗大結界』というのがあるから、普通には外へはいけない。といっても本当に透明な壁があるわけじゃないけどな。行ってもなんかよくわからん霧みたいなので進めなくなるだけで」

「はあまあそれはそうなんでしょうね、と蛭人はしらじらしくよく分からないですけどとばかりに相づちを打つ。」

「その博麗大結界を管理しているのは、東のほうにある博麗神社の巫女だ。通称博麗の巫女。普段は妖怪退治をやってる。外来人は帰還を希望すれば、彼女の助けを借りて外へ帰れる、らしい。さすがに帰ったその後は知らないけど」

「だいたい生きて人里までたどり着く人間は一割もないらしいからな、おれも良くは知らない」と宮崎は付け加えた。

蛭人は来るまでの道のりを思い出して納得した。妖怪一人、妖獣らしきもの二頭、妖精数匹、というのが彼が人里に来るまでに出会った人外の数である。このうち少なくとも三回は普通の人間ならば命を落としていても不思議はなかった。

「だから久瀬くんは久しぶりの外来人だ。夜の再思の道からひたすら歩いてきたなんてね。本当、よく無事だったもんだよ。体力もあるし、なにより運が良かった」

「まあ……きちんと道を教えてくれた人がいましたから」

「風見幽香ね……。ものすごく怖い妖怪らしいけどね、彼女は。まあまれに人里にも来るそうだけど……。そういう意味でも運が良かった。久瀬くんの対応が良かったのかもな。」

それで、久瀬くんはどうする？」

残るか帰るか。『博麗神社』なるところへ行けば、外来人はその人が来たところ　つまり、『外』へ帰してもらうことも出来る。しかし、蛭人はそもそも人間ではないし、その『外』に自らを置く楔を無くし、ここへ来ようと思っていた。そのためにわざわざ身の始末までしてやってきたのだ。今更その選択肢はありえない。

「今のところは、ここで頑張ってみようかなと思ってます。ちょうど、環境を変えようと思っていたところでしたし」

なんだか面白そうなところですね、とミーハーっぽく蛭人は付け加えてみた。たいがい演技だが、本音でもある。日本にそんな隠れ里のような場所があり、理にかなった結界まで張って成り立っているというのは非常に興味深い。

彼の答えに宮崎は頷いたが、少しばかり難しい顔だった。

「新鮮だよな。おれもそうだったし。ただ、いろいろと苦勞も多いよ？ 家族とも会えない、職もない、人間関係はゼロから。つらいこともある。」



例えばおれはもうここで五年生活しているし、帰りたいたいと今更言っても博麗の巫女は外へ出すことはしない……、だろうと思う。久瀬くんもあまり軽くは考えないほうがいい。せっかくの運の良さもペアになる」

それなりに苦労したのだろう、宮崎は含蓄のあることを言う。

「覚悟はしておきます」

「それでも一応な。『こんなはずじゃなかったのに』みたいなことを、一度も考えないということはないと思うから。」

ま、結論は少し時間をおいて出せばいい。あまり大したことはしてやれないけど、飯だけは用意できるから」

食事もはつきり言って不要なのだが、これだけでも世話をしてくれるというのは、この立場の人間ならば相当にありがたい話である。

「はい。ありがとうございます」

「うん。疲れてるだろうから、これからのことは明日にでも話そうか。今日は休もう、もう遅い」

宮崎はもう寝るつもりになっている。少し眠そうにまで見えて蛭人は驚いた。

腕時計を見ればまだ九時といったところである。自分にとっては肉体的にも習慣的にも今からが一番動きやすい時間。しかし、電灯の灯りが無いこの幻想郷ではそういうものなだろう。夜に特に用事が無いのなら、さっさと寝るのが正しいのだ。行灯の油がもつたいないから早く寝る、なんて言葉が江戸時代にはあったらしいが、このメイン照明はまさしくその行灯である。これが蠟燭やガスランプだったとしても大して事情は変わるまい。日の出と共に起き、

日が沈んだら寝る。自分とはまさに正反対だ。

改めて考えてみれば当然のこと。しかし、あまりの感覚の違いに、こりゃなじむのが大変かな、と蛭人は思ったのだった。はやまっ  
たかな、とも。

人間の里（1）（後書き）

そうそう都合よく原作キャラばっかに出会ったり、お世話になったりするわけないよね。というわけでオリキャラ。  
こづいづ感じで今後も適当にキャラが捏造される予定です。

## 人間の里(2) (前書き)

今回はお食事問題について。

## 人間の里（2）

（……寝たか）

座布団を枕に床に寝ている宮崎が軽いいびきをかきはじめ、蛭人は起き上がってそっと寝床を出た。外からは秋の虫の声が聞こえる。

宮崎が用意してくれた、彼が普段使っているという寝床はそれなりに心地良いが、寝る気にはならない。昨日からの活動時間的には眠くなってもいいところだが、やはり体に染み付いた習慣はそう簡単には変わらない。

それに、もう一つ重要な問題がある。

（ああ畜生、腹が減った）

宮崎に簡単な食事は用意してもらっているが、そちらは本来不要のものである。現在、付き合い以外で蛭人は一般的な意味での食事をすることはなかった。本当に必要なのは血のほうだ。炊事道具らしい竈やらがある土間にやってきても、当たり前だが自分の腹を満たすものはない。

蛭人は大体二日に一度の頻度で人を襲う。基本的には仕事帰りに擦れ違う誰かを魔眼で捕らえ、血を吸ってその記憶を奪うということの繰り返しである。閉店まで飲んでいた者、ホストと遊んでいた女、繁華街の深夜は襲う人間に苦労しない。相手も酔っていて隙だらけなので非常に楽に食事は済む。

気合で多少日中に活動することもあるため、必要以上に頻度は高

めである。その分、血自体はかなり控えめにしか吸っていない。だから腹が減る。

彼にとってこの人里には、いくつかの誤算というか、問題があった。

まず、この人里には宿というものがほとんど存在しないということ。この幻想郷にはここ『人里』以外、基本的に人間の住まう場所がない。だから宿泊施設などというものも存在しない。色々話を聞いたのはありがたいが、あまり生活を他人と共にしたくない蜚人としては、これはあまり嬉しくないことだった。

そして総人口が少なく、町が二つとないというのは、都市から都市へと渡り歩き、人ごみに身を紛れさせてきた都会派の吸血鬼としては非常に難しいものがあった。当分はいいが、数年……長くとも五年くらいで、容姿が変わらないことはあまりよろしくないことになる。

(あいつなら、何とかなつたんだらうが……)

蜚人を着属にした吸血鬼は、はじめはかなり老齡の姿をしてはいしたが、本来の姿は自分より若い少年だった。人物が変わるわけでもない自然な加齡を装っており、驚く自分に向かって年齢を偽ることのメリットのようなものを滔々と語ってくれていたが、なにぶん聞いている場合ではなかったため手段の詳細は知らない。

もしかすれば、魔法使いとか言う種族がいるくらいだ、それこそ魔法だったのかも知れないな、と蜚人は思い出して思う。

これまで都市という互いが互いに無関心な環境の恩恵を受けてい

ただけに、その違いは大きい。そこまで小さくはないとは言え、恐らくここは田舎の村社会のようなものだ。近い者なら互いに見ているだろう。今までのように、ろくに食事をしないなどということもおかしなこととして見られるかも知れない。

(難しい場所だ。幻想郷)

見上げれば、窓から見える満月が眩しい。

月光には力がある。とくに満月には。この幻想郷では、自分にもはつきりとそれが感じられる。難しいが、ここはいい場所だと蜚人は感じた。空気が良い。光がいい。空間がいい。なんというか、馴染むのだ、ここは。

自分の力はより強くなっているように感じる。同様に、外とは違って他の妖怪変化のたぐいも、自分同様に力ある存在となっているのだろう。外でも吸血鬼は忘れ去られきった存在ではなかった。だから相対的に強かった。自分以外はほとんどが消えかけの存在ばかり。しかしここでは話が違つようだ。

忘れ去られたもの。常識外のもの。死にたがりの人間。そういうつたものがやって来る場所だという。自分は常識外の存在としてやってきた。なんとなく、ここへ来るべきなのだろうと思つたのだ。そういう場所なのだろうと予感していた。そしてどうやら、その予感は正しかった。

自分は別に、あちらで何度か見かけた妖怪たちのように、人間から認識されないほどに存在が薄れていたわけではない。だが、ここではもうやっていけないような気はしていた。きっかけは確かに友人たちがいなくなったことだが、むしろそれ以前からもつと何か：

…。

(……しかしマジで腹が減った)

今すぐぶっ倒れるとか我を忘れるとかいうレベルではない以上、多少きつくても我慢すべきなのかも知れない。というか、我慢すべきだ。

手っ取り早く宮崎を襲うというのもありなのかも知れないが、虫人は基本的に身近な人間を襲うことを避けていた。どこから居場所をなくすか分かったものではない。ついでに贅沢を言えばなるべく女性がいい。腹の減り具合から言って、あまり気にしてられないレベルだが。

「……ハア」

やはり諦めるべきか。そう結論し、虫人は静かに寢床へ戻ったのだった。

「随分疲れた顔をしてるな。ま、無理もない」

早朝、少々げっそりしていた蛭人の顔を見るなり宮崎はそう言った。

「うーん……そういうわけでもないんですけど。いつもと違う時間ではどうしても眠れなくて」



「ああ、そういえば夜の仕事をしていたんだっけ」

眠いというのも実際あるが、本当は単純に射しこむ朝の光が辛い  
のと、腹が減っていることが原因である。日光は、朝の光が一番辛  
い。

「朝日が出る頃に寝るのが普段の生活でしたね」

「なかなか不健康そうだ。体も細いし色も白いし」

にやりと笑う宮崎の方は、日に焼けて浅黒い顔をしている。田舎  
の農家の老人みたいなごつごつとした無骨な体つきで、元々は普通  
の会社員だったという面影はない。実際には細くても馬鹿げた腕力  
を持つ蛭人より力は弱いだろう。しかし、なんとなくその無骨さに  
は力強い魅力があった。

「さて。おれは仕事だけど。久瀬くんはすぐに帰ろうという気がな  
いんだから、まあ今日はゆっくり里の中でも見て回ってるといい。

あと昼飯」

食事を済ますと、宮崎はてきぱきと作務衣のような服に着替えて  
ぼんと包みを渡した。握り飯といったところだろう。蛭人は曖昧に  
頷いてそれを受け取った。

人里からは出ないようになどといった注意をしたあと、夕方には  
帰る、と宮崎はさっさと出かけていった。

「さて……」

朝のうちは外に出る気になれない。その前に、少しくらいは寝て、  
あと今後の人里での暮らしを考えなければならぬ。

現在、持ち物は鞆一つ。中身はそれなりに大切な物ばかりである。

まずこの幻想郷に来る前。彼はなんとなく、自分がどういったところへ行くこうとしていたのか、というのは分かっていった。しかし、具体的にはいったい何処へ行くのかというのが分かっていなかったため、鞆には大切なものと必要になりそうな物、二種類のものがある。

必要になりそうな物、の中には宝石などの貴金属類もある。これが現状もつとも役に立ちそうである。そんなに大量にあるわけではないが、一人で暮らすための生活基盤くらいは手に入る……かも知れない。ここでの価値によってはわからないが。

金のめどがあっても、何も仕事をしないと行かない。やはりこれまで通り夜の商売をするのがいいだろう。ああ、そういえば、夜の仕事をすると大事なものが要るのを忘れていた。ここで手に入るのだろうか……。

うとうととしている間に太陽が中天に上り、ぼんやり持ち物を確かめながら今後のことを考えたりしていると薄い雲に太陽が隠れていた。必要はないが、用意してくれたものを無駄にもできないので握り飯を消化して、ようやく行動開始である。宮崎が用意してくれた着流しに着替え、鞆から取り出した帽子をかぶると、蛭人はぶらりと外に出た。

蛭人は太陽の光を苦手としてはいるが、即致命的な弱点というわけではなかった。せいぜいが火に焼かれる程度……と言えはなかなか深刻だが、直射日光をモロに浴び続けなければそう大したことにはならない。長時間さらされれば間違いなくのたうちまわって苦し

むことになるだろうが、少なくとも、波紋で退治される吸血鬼のように体が灰になったり煙がでたりはしない。

故郷の土がなければならぬということもない。雨やにんにくは嫌いになったという程度で、十字架も効かない。招かれなくとも家には入れるし、鏡にだってちゃんと映る。色々と特徴の薄い吸血鬼だと言えるかもしれない。吸血鬼にも色々と出身（地方性）があるということだろう。吸血鬼といえばルーマニアだが、蛭人を眷属とした吸血鬼は（今となっては嘘臭いが）英国紳士を名乗っていた。

吸血鬼としてはあまり一般的でなさそうな弱点を抱えてもいるが、まあ妖怪退治を生業とするという博麗神社へ近づかなければいいだろう。帰還を希望しないのならば行かなくてはならないということもなさそうである。

ふらふらとなるべく日光を避けながら歩く。『人里』は活気にあふれた町であるようだった。人通りもそこそこあるし、店屋には市場のような明るさがある。都市とは違って大きな日陰がないため思った以上にしんどいが、まあ耐えられないようなものではない。

素晴らしいことに、古い習慣が生きている町にもかかわらず、彼が苦手とする気配は少なかった。

人にたずねたり、自分でふらついたりするうちにそれらしい店や卸店にいくつか目当てを見つけ、さっさと宮崎の家へ戻った。

大工の見習いのようなことをしているという宮崎は、陽が沈む頃には家に戻ってきた。他にも細々とした仕事をやっているという。色々と手が広いらしい。

昨夜と同じく食事をしながら、人里の様子、また今後ここで暮らすに当たっての注意、どんな仕事があるか、すべきか。その日はそういった、今後のことがメインとなる話を二人はした。

「バーテンダーねえ。ここには……たぶんないな、バーは。それっぽいのはあるかも知れないけど、ちゃんとしたバーはない。それに最近は妖怪の客も来るようになってきているからね。ますます上品な飲み方はしないんだよ。」

それにしても社員……アルバイト……懐かしい響きだなー、ハハ」

アルバイトなどではなく社員として働いていた、という蛭人の言葉に宮崎はそんな言葉を返す。

「まあ、バーなら上品ってわけでもないでしょうけどね。ないんですか、アルバイトとか社員って言葉が」

「あるけど、一般的ではないね。変なところで言葉が新しかったり古かったりするから。里の他の人だと通じないんじゃないかな、さつきまでの久瀬くんの話も。多分だけど、バーテンダーって何？ っつて半分くらいの人は言うと思うよ」

「それはまた……」

話が面倒そうだ。自分が何をやってきたのかも伝わらないとは。

「まあ、夜の仕事ならなんでもいいんです。ここには……うーん、遊郭？ みたいなのはありますか？ ああいうところでも良いですし」

つなぎの仕事で、風俗のボーイやら何やらをやったこともある。なんにせよ蛭人はこの二十年、夜の水商売・風俗以外の職を持ったことがない。二十歳くらいではじめに仕事を選ぶとき、時間帯は夜、そして後腐れがなく、身分や書類をごまかしやすいといった条件でその手の場所を選ばざるを得なかったのだ。今ならば色々と選択肢もあるのかも知れないが、わざわざ変える必要もない。夜の仕事をなんでも構わなかった。

「あるよ。んつと……ああボーイか。こつちも言葉が出なくなってきたるな。そういうのか。どうだろうね。ま、そういうところも含めて一つ一つ聞いてまわれれば、仕事は見つかるだろうな」  
「そうか、それなら良かったです」

金は最低限あれば生きて行けるのだ。粘ればなんとかなるだろう。

「あとはまあ、なんだ。もし特別な外の技術とかあれば、人里で優遇されたりもする、かも」

外来人は、こちらにない知識を持つ。幻想郷は外に比べると『遅れている』。だから幻想郷の人々は外来人に、なにか新しい知識や技術を期待するところがあるのだ、そう宮崎は説明した。

「はあ……とは言っても、僕はごく普通の社会人でしたし、これまでやって来た外来人と違う知識というのはちよつと思いつかない気がしますね。なにか特別な技術者とかでもないですし」

「まあなんでもいいのさ。例えば俺の時は、サッカーがなかったから教えたなら流行った」

「サッカー……なるほど」

そんなものでもいいのかとは思いつつも、やはりすぐにパツと思いつくようなものはない。考え込むと、宮崎はしばらくいるうちに思い出すこともあるかもな、と言った。

「おれはちよつと体動かしたくなってリフティングやってたら子供に注目されてな。それでサッカーを教えたんだ」

「リフティングか……。まあ似たようなことはできますけど、毛色が違うからちよつと役に立たないでしょうね」

空になっていた湯のみを取り上げて、蛭人はちよつとした芸を披露してみせた。

倒した湯呑みを、右の手のひらから腕の上をころころと転がし、肘でぽんと跳ね上げる。それを空中で左の手で掴みとってさらにほうり投げ、くるんと回転する湯呑みを背中に回した右手で受ける。

コン、とそれを置き直すと、ぽかんとしていた宮崎が驚きの声をあげた。

「すげーな！ あれだろ今の、なんだっけ昔の……。あー映画の！」

やってみせたのは、いわゆるフレイバーテンディングの真似事である。音量をあげた音楽とともに派手に酒瓶やシェイカーを放り投げて見せながらカクテルを作る、ラスベガスなどで好まれるいわば見世物芸だが、蛭人の経験と身体能力からすれば、はつきり言うてたやすい。

「トム・クルーズの『カクテル』ですね」

「そう、それだ。懐かしいなあ」

少しばかり宮崎は遠い目をした。もう、十五年か二十年くらい前の映画だ。年齢的にみて、彼にとってはまだ少年時代くらい頃のものだろう。再放送はよくやっていたから、それで見たのかも知れない。

「まあこういうこともできます。けど、バーもないところでこんなことが出来ても大して役に立つとは思えないですね」

実際のところ蛭人は宮崎よりも年が上なので、彼がバーで働くようになった頃はこの『カクテル』という映画の影響がもろに残っていた時期だった。しばしばバーテンダーたちは酔って冗談交じりにトム・クルーズの真似をやり、グラスや酒瓶を割っていた。酒屋の業界も昔とは変わってきて、最近では話題に上ることすら珍しかったが。

「あー、まあそっか。そもそもああいうきれいな酒瓶や道具がないよな。宴会の一発芸って感じか？」

「そんなところです。何かあるかなあ。役に立つこと。……そのうち何か思いついたら言うようにしますよ」

そんなふうな話を広げたりしながら、その日の話を締めたのだった。

がたがた、と音を立てて引き戸を動かす。

「ん……む……？ 久瀬くん？」

「どうも眠れないんで、少し外を歩いてきます」  
「ああ……うん。気をつけてな。里から出るなよ」

わざと立てたやや大きな音に目を覚ました宮崎に、はい、と返事をして蛭人は夜の人里へ出た。夜の人里を歩いてみたいというのも、どうも習慣上早くには寝れないというのも話してある。今日は出歩く。限界だ。腹が減った。

人気がない、暗い道をさらに暗い方へと歩く。十六夜の月明かりだけで、蛭人には十分である。夜も明るい辺りは、妖怪、または退治屋のたまり場となる場所。それらを対象とした店。そう聞いている。そういったのは主に人里の外縁部にある。そこらは避ける。そこ以外の場所から人里の奥へと帰っていく人々が、いい。

蛭人は闇に体を溶けこませ、消えた。



## 幕間

給料をもらって、久しぶりにしこたま飲んだ帰り道。

「さむ」

彼女はふと寒気を覚えた。もうそろそろ、幻想郷は秋も深まって寒さが厳しくなってきた。緩めていた襟の合わせをぐっと正して足を急がせる。季節の変わり目、給料もらって酒を飲んで風邪を引きましたでは勤め先で怒られるだろう。

いい気分のうちにさっさと帰ろう。

そう思ったとき、何の気配もなかった目の前の闇がギュッと濃くなった、ように見えた。しかし、何もいない。

いや、気配はある。人ではないもの。具体的に言うなら人に害なすもの、妖怪の気配だ。よく目を凝らせば、闇の中に溶けこんで影のようなものがゆらゆらと立っている。厚みのない平板な影がそのまま立ち上がったような、妙なシルエット。距離感のつかめない二次元的なそれが、ひどく不気味に見えた。

逃げようか。

人里の中とは言え、手を出さない妖怪だけではない。たまにはそういう妖怪もやって来る。というよりも、たまにやって来るのは大半がそういうのだ。近頃平和だから少し忘れかけていたけれど、本来そういうものなのだ。

そんなことを思う間に、影の中からにじみ出るように青年の姿が現れた。顔はよくわからないが、たぶん見たことはない……黒髪に痩身、色白。ごく普通の、若い青年に見える。あまり着流しが似合っていない。というか、着慣れない服を着ているような。いつの間にか、妖怪独特の気配はしなくなっていた。青年は人間にしか見えない。自分よりも若いだろう。けれど、そうではないはずなのだ。そうとしか見えないけれど、そうではないはずなのだ。

逃げたほうがいい。でも、足が動かない。なんだか急に力が抜けてしまったようだった。声を上げれば近くの家のものが反応するはずだし、退治屋だって呼んでくれるだろう。でも、声が出ない。体が動かない。

どうしよう。どうすれば。

「今晚は」

「あ……こん、ばんは」

声をかけられて、ようやく竦んでいた体が動いて返事ができた。そして目を上げたとき、影から出てきた青年の目が赤く輝いた。

人間にはありえない目の光。見た瞬間びしりと体が動かなくなる。

ああ、やっぱり。逃げなきゃ。

それが彼女の、今夜最後となる正常な思考だった。ぶつりと意識が途切れ、切り替わる。逃げるなどという考えはもう湧いてこない。

「はあ、人間にはちゃんと効くようだな。」

……ああクソ、マジで腹が減ってたな。疲れてるし。　　そうい

うわけだから、多めに貰っていくぞ。貧血くらいなるかもしれんが、まあ大丈夫だろ」

そんな言葉が聞こえる。どうしなくてはならないのかは彼の目が伝えてくる。彼女はええ、と返事をする。『そうしやすいように』襟元を緩めた。

「うん。それじゃ、いただきます」

その声に、彼女は「どうぞ」と応えて目を閉じる。ふわりと広がった影が彼女を抱きすくめ、

そぶりと首筋に何か突き立った。

## 幕間（後書き）

晴れて幻想郷の暗黙の掟の違反者に。  
ああ、なぜわざわざ禁忌に挑むのか。  
人里の守護者とか大丈夫なのか。  
アホなのか。ばれないのか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3064ba/>

---

幻想郷隠棲録

2012年1月14日12時52分発行